巻頭言

就任挨拶

（一財）砂防・地すべり技術センター
理事長
栗原（くりはら） 淳一（じゅんいち）

当財団の機関誌『sabo』を毎回ご覧いただいている皆さま、誠にありがとうございます。

昨年（2023年）10月24日に開催された理事会で理事長に選任いただき、既に数か月が過ぎようとしております。ご挨拶が遅れましたが、何卒よろしくお願いします。

このたびの能登半島地震により被害を受けられた皆さまに心よりお見舞い申し上げます。原稿執筆の時点では、災害の全容が把握できておりませんが、甚大な被害が発生しており、被災地域の復旧・復興が迅速に進むよう砂防・地すべり技術センターとしても取り組んでまいります。

それでは、自己紹介をさせていただきます。私は昭和59年（1984年）に当時の建設省に採用され、最初に広島県砂防課に赴任しました。1年後に同県呉市にある土木建築事務所の工務課の担当に配属されました。呉市は急峻な斜面に囲まれ、斜面部の道路は軽自動車しか入れないほど狭く曲がりくねっていて、そういうところにびっしりと人家が張り付いていました。軍港だった呉市は戦艦大和などを造るため、全国から作業員等が集められ、狭い斜面都市にピーク時で40万人が住んだために、斜面に多くの住宅が立地してました。急傾斜事業の工事が最初に行われたのは同市の警固屋（けごや）という現場で、工事の開始時にNHKの朝のニュースで全国に中継されたと広島県の当時の片岡課長にお聞きしました。最初の急傾斜工事は他の幾つかの県でも同時に始まったと認識していますが、呉市が代表的だったのかと思います。そして、平成2年（1990年）には富山県にある立山砂防事務所の調査課長に赴任し、あの白岩堰堤がある立山カルデラの砂防調査を担当しました。呉市とは全く異なる急流河川の源頭部になりますが、昭和の初めに行われた白岩堰堤の工事写真を見て、最新鋭のクレーンを山中に持ち込んで高さが60mを超える白岩堰堤を造った先人の「技術力」と「組織力」には、ただただ敬服するものでした。この2つを紹介したのは、砂防という事業は時代の流れとともに、行う場面がどんどん変わっていくのだと考えているからです。

話は遡りますが、明治の時代となり、近代日本政府が最初に行った砂防工事は淀川の上流でした。当時の大阪港は今と違って安治川河口から700～800m上流の河岸にありましたが、上流からの土砂の堆積がひどいために外国船の入港が困難になるという厳しいものでした。オランダから招へいされた技師達は荒廃に驚き、砂防の必要性を説いたことで砂防工事が始まったとされています。当時の日本経済の中心は大阪でしたが、大阪港へ入港した外国船は明治元年（1868年）に89隻だったのが、船舶の入港が難しくなって2年後には11隻に激減し、神戸港や四日市港に移っていったと上林好之先生の書籍に記されています。ちなみに当時の大阪港の堆積状況の写真をネットで必死に探し、数枚見つけました。残念ながら土砂の堆積が分かる写真ではありませんでしたが、明治初期の大阪港の河口の写真を見ながら、先人の苦労を想像しております。

それから150年が経過し、我が国は新たな社会変化が進んでいます。その主なものは、気候変動や人口減少などかと思います。これらは日本がこれまで経験したことのない変化ですから、経験値ではなく想像力も重ね対処していくことが基本と思います。災害の頻度が高まり流出土砂量が変わるだけではなく、社会構造そのものが変化していく可能性がありますから、人材、受発注、工法、施工などが広範囲に変わっていく可能性が強いと思います。当財団は、2025年に創立50周年を迎えます。当財団の名称は「技術センター」ですから、国や自治体が進める土砂災害対策の“技術”を支えることが大きな使命です。先ほど述べたような変化の中でセンターの役割は大きくなるように考えております。職員数70名強の決して大きくはない組織ではありますが、職員全員が「砂防の技術」の仕事をしている組織です。21世紀後半がそろそろ見えてくる時代に入ります。社会や現場の状況と変化に注意して職員と歩んでいきたいと考えております。どうぞよろしくお願いします。

上林好之（1999）：日本の川を甦らせた技師デ・レイケ、草思社、p.42
呉市の人口推移：https://www.city.kure.lg.jp/uploaded/attachment/73599.pdf